

い釣れ釣れなるままに

2002年思い出の溪流釣行記 PART. 2

どどどがイマ

鹿島釣狂

ラインの進化

午前9時に家を出る。本日は内大部川の下流域に展開する。更進地区を抜けた橋から川原に出る。川原が大きく開けていて5.4mの竿を振ることも可能だが、扱いやすい3.6mの短竿を使う。1投目、2投目にウグイが出る。ここまで下流域になるとやはりウグイの川なのかと思うが、その中に混じってニジマスもポツン、ポツンと出てくれる。その中に、昨日（前『釣れ釣れなるままに』参照）釣り上げた名前の分からない魚と同じ色や形の魚が出る。銀ピカでニジマスのような藍色の斑点は無く、側線部分をピンクに染めている。20cm程のものもいるので、四方（よも）やサクラマスということはないだろう。サクラマスの幼魚だとするとパーマークがあるはずだ。

さらに川を遡って行くと大きな堰堤があり、その下の大きな落ち込みで竿を振る。いきなり派手な色をした39cmのニジマスが出た。何度も見事なジャンプを繰り返す。ハリスは昨日と同様1.5号を使っていたので、こいつは難無く手にすることができた。

さらに何匹かニジマスと遊びながらさらに上流に遡行する。だらだらとしたチャラ瀬が続き落ち込みがない。更新橋の上流で護岸工事をしている。そこから土手の上を歩いて入川した車のところに戻る。

雨が降りだした。車に入って様子を見るが止みそうもない。少し小降りな^{うるさ}ったところで、車から出て今度は下流域を攻める。程よい淵が適度にあるがニジマスよりウグイが煩^{うるさ}くな

ってきた。

真新しい緑色の橋の見えるところに大きな堰堤がある。そこには魚が遡行できるようにと階段状になっている。堰堤の中心部は勢いよく水が流れているがその脇には魚の休憩所と思われるプールが広く取られているのである。その下で本日最後と思われる釣りをする。一番深くなっている左端でミミズのエサを流す。ウグイばかりがかかる。中には45cmはあろうかという大型もいたが、それと分かる引きで、ニジマスのようなスリル感はない。これも1.5号のハリスでゴボウ抜き出来たのだから、いかに最近のラインが進化しているかが分かる。その魚にお帰りを願ったところで帰宅する。

養殖魚の子孫

午後3時、エサを買い求めるためにいつもの釣り具店に向かう。すると店のシャッターが下りており、日曜日は定休日であると張り紙してある。日曜日などは一番買い物客が多いのと思うが私共には分からない事情があるのだろう。以前、市内のスポーツ店に立ち寄った時、その隅に釣り具が並べられていた記憶をもとに、間口の狭い店に行く。店は開いており、奥から足のご不自由な老店主が出てきた。幸い柳虫が発泡スチロールの容器2ケースだけ入れられており、それを買い求めた。

旭川に向かう道道に架かる朱塗りの橋から沢に入り、その下流域に展開する。仕掛けを結んでいる時に愛用の3.6mの竿の穂先の部分が抜けてくる。何度か押し込んでみたが軽く引いただけでも簡単に抜ける。継ぎ目部分にテグスを差し込んで応急措置をするが、何とも心もとない。傾いた西陽に向かって遡行することになるので川面がギラつく。ここでは今までは手にしたことのない新子のニジマスが相手してくれる。釣り進んで行くと、人だけが通ることのできる鉄製の赤い橋の上で、地元のご老人がこちらを伺っている。あいさつを交わした後、その橋の下の淀みで釣れたニジマスを川に戻していると

「今の魚は何かね。」

「ニジマスです。」

「何匹か釣れたかね。」

「釣れるのは小物ばかりです。」

「わしは昔、ニジマスを飼ったことがあるが、大水になるとみんなジャンプして逃げ出して行ってしまった。」

「私が釣らしていただいているのはそのニジマスの子孫ですね。」

「そうじゃろう。大物もいるはずだから頑張りなさいよ。」

本流との出会いに差しかかった。川筋が深く抉れており魚はいると直感できる。体を低くして淵に近づき竿を振る。コツコツとしたアタリの後やはり小物がかかる。ここでは小物に交じって25cm程の物も4本出たが魚の引き込みが弱いのが気にかかった。出会いの下流や上流域でもしばらく釣り歩いたが、その所々にあるよい落ち込みにも魚が出ない。午後6時、田圃のあぜ道を通って車に戻った。

帰宅後、スッポ抜けた愛用の竿先を修繕する。トップの根元に瞬間接着剤をつけ乾燥させる。これでしばらくは使えるだろう。

どっどど どどうど

午後から釣りに出掛ける。内大部川では最後に残った中流域である。橋の袂で胴付きを履いていると、一人の老人が近づいてきた。こちらの様子を見て、手首を返す仕草をする。「釣りに来たのか」ということだろう。年齢を聞くと74歳という。

「旭川から自転車で来た。更新の沢の入り口にある堰堤の下でヤマメを釣ったがリリースサイズばかりであった。これからこの橋の下流の深みを狙ってみようと考えている。」

鏝の広いモスグリーンの帽子に濃紺のチョッキといういで立ち。顔に刻まれた年輪には似合わない鬢髭（かくしゃく）とした風貌である。

「芦別の炭鉱に勤めていたが閉山で札幌市へ出た。旭川の娘と一緒に住もうと言ってくれて現在は同居している。先日、実の息子と美深のニウプ川へヤマメ釣りに行って来た。その昔、この内大部川へは何度も通った。川の護岸工事をする前は、深い淵がたくさんあり魚も大物が良く釣れたものだ。50cmを超えるものを上げた。2号の道糸を切っていった奴を仕留めるために、鯉竿を用意し、4号の道糸でやっと仕留めることができた。一時期は早朝に10人もの釣り人が一カ所に大挙して押し寄せたこともある。3年前ぐらいから護岸工事が進んで溪相がすっかり変わってしまった。新城峠を越えたパンケ幌向川にもいい魚がいた。上流の管理釣り場から逃げ出した魚なのだが、こう川が真っすぐになってしまっただけは大物も住めなくなってしまうだろう。」との話が延々と続いた。

橋のすぐ上流では今まさに工事中の重機が川底を掘り返している。ダンプがその土を積んでひっきりなしに通っている。そのさらに上流から入釣した。橋から1km程上流に護岸にぶつかる深い溜まりがあった。護岸の上にはまだ青い実をつけた大きなクルミの木の枝が覆い被さっている。川底に魚が群れをなしているのが見える。光の加減で底にいる魚がよく見えるのだが、大物はいないようだ。静かにエサの柳虫を送り込む。ここで、25cmと30cmのニジマスが出た。

にわかには風が出て来た。

どっどど どどうど どどうど どどう
青いくるみも吹きとばせ
すっぱいくわりんも吹きとばせ
どっどど どどうど どどうど どどう

宮沢賢治の「風の又三郎」の一節に出てくる風の様にとっどど、どどうと吹いてくる。私は溪流ではガン玉等は付けずにハリスを替えるためのヨリモドシだけのほば『ふかせ釣り』なので、風が出ると弱い。

それでも、竿を振って遡行していると向こう岸の護岸堤に白テンが現れた。いや白テンと言うことはなかるう。野生化したミンクであろうか。イタチではない。銀白色の毛が夕

陽を浴びて艶（つや）やかに光り輝く。こちらの様子を伺いながら頻りに毛並みを整えている。釣り上げたばかりのニジマスを投げてやると、一旦は護岸堤の中にもぐりこんだが、すぐに出て来てピチピチしている奴を唾えこんで姿を消した。

さらに上流に進んだが2尾が相手してくれただけで夕暮れが追って来た。片道4キロぐらいも入っただろうか。遡って来た川の中を歩いて橋に向かう。これで内大部川は枝川も含めて全て制覇した。魚のいる場所も分かったので、これからは毛鉤を振ってみよう。

新米フライマン

本日からフライでアタックしてみようと思う。釣り会に入って磯釣りに夢中になる前は、何度かフライにも挑戦してみたがあまり芳しい結果を生むことは出来なかった。一通り道具類はそろっているが、ドレッシング類が干からびている。

フライ用品を購入するため、滝川に最近できた大型釣り具店に出掛けた。店に着いたのは10時少し前だったために開店しておらず、待たされることになる。日曜日ということもあるのであろうか、数人が同じように開店を待っていた。

店内を散策していると、触手を伸ばしたい物が沢山陳列してある。なけなしの小遣い生活の身では目に毒である。熊避けの鈴がおいてあった。芦別の山々は熊の出没の多いところである。私は出くわしたことはないが、人里離れた山奥に入るとやはり背後に不気味さを感じる。鈴というより鐘のような、音色が澄んでとても気に入ったものを見つけ出す。しかし、値段の符丁がついておらず店員に確認する。その店員にも分からず、代わりに店長と思われる方が出て来て、パソコンに入力しはじめた。パソコンが告げたのは商品番号なのだろうか、その番号をレジに知らせている。おそらく、バーコードのようなものなのだろう。レジで打つと1980円と出た。大変便利なものだ。値段を聞いただけがそれで済まされるはずもなく、結局、買うことになった。

また、天秤ナマリが不足していたことに気づき、店員にその在庫を聞いて見る。しかし、「そんなものはない。」と素っ気ない。品揃えは豊富だが天秤ナマリがおいていないのには驚いた。マニアックなものであまり需要がないのだろうか。我々釣り会ではごく一般的なものだと思うのだが……。さらに、チヌ針もおいていなかった。

粉末と液状の2種類のドライドレッシングと口の大きいタモを購入して、内大部川に向かう。ドッピーカンの昼間である。果たしてニジマスが出るのであろうか。

ドライフライを振る。しかし音沙汰ない。エサ釣りの時は確かに沢山のニジマスが相手してくれた淵ではあるのだが……。フライの種類を替えながら1時間ほど粘ったが、やはり状況は同じである。

ニンプに変える。出た。しかし、ウグイである。これもいくつか替えてみるが同じようにウグイばかり来る。そうして、自分では気に入ったものではなかった黒っぽいニンプに替えて流した時、すぐにニジマスが出た。やはりニジマスはいたのだ。何匹かニジマスが続いた後、気を取り直してもう一度ドライフライに変える。やはりドライでは未熟な私に

出てくれるようなニジマスはいない。

ニフにしたりドライにしたりを繰り返しながら下流に向かう。下流の淵でニフを流していると地元の人が二人、会館から出て来て私に近づいて来た。そして、様にならない私のキャスティングを眺めている。丁度、その時、例の名前のよく分からない25cm程のマスが釣れた。形はニジマスと同じなのだが藍色の斑点は無く、側線部分をピンクに染めた美しい魚である。魚類図鑑などでも調べて見たのだが当てはまるものがなかったのだ。早速、彼らに尋ねてみた。

「それは、ホウライマスと言うんだ。まだ、いるんだねえ。以前、この辺りで養殖されたものが逃げ出したことは聞いていたが、この川で繁殖しているとはねえ。」

これで長い間疑問に思っていた謎が解けた。さらに、

「この川にはデカイのがいるぞ。先日も地元の高校生が60cmのニジマスをあげたということだ。それを魚拓にして床の間に飾ってあるそうだ。そんなもの振ってねえでカエルでやれ、カエルで。地元の間人はカエルやバツタをエサにして釣っているんだ。俺は今はやっつねえが、昔はよくカエルでデカイものを釣ったもんだぞ。」

と話を続ける。60cmの話を知ると早速カエルでという気持ちになるが、あいにく今日はフライでやると決めていたので道具を用意していない。

二人を見送った後、先日の老釣師がヤマメの新子ばかり釣れたと言っていた言葉が気にかかり、その堰堤に向けて車を走らせる。堰堤の下の浅い流れにヤブ蚊のような小さなフライを浮かべるとパカパカやってくる。釣り上げてみるとニジマスの新子である。彼が言っていたのはこいつだったのだ。これだけの新子がいるということはニジマスにとってまだまだ新たな命を生み出す豊かな川であるということなのだ。

輪廻転生

川の縁に並んだタモの大木の根元に淡い黄色のキノコがムグムグと頭を持ち上げている。タモギタケだ。私の祖母が刈り入れた稲束を乾すハサギに使ったタモの木の根元から採ってきたものをみそ汁に入れていたのを思い出す。数多くのキノコの中でもナメタケと並んでおいしいと思うが果たしてタモギタケと断定するだけの記憶は定かでない。

この地域の秋の野山は、実に豊かである。木の実しぐれという言葉があるほど、わずかな空気の動きでカエデの種がヘリコプターのようにヒラヒラ舞い落ちる。栗やドングリ、桑の実などが落下し、鈴なりになったコクワや山葡萄も甘みを増す。地上のにぎやかさも負けてはいない。枯れ葉の下から、色とりどりのキノコが発生する。春から夏にかけて、山は緑一色だったのに、秋になると、木の葉は色づき、やがて散っていく。諸行無常である。

私たちが例外ではない。今日は敬老の日であるが人間は歳をとる。すると、細胞が老化して、体内に活性酸素が増え、免疫力がダウンするのである。体力のある若いころの免疫力を十とすると、40代で七、60代で四程度まで落ちてしまうということだ。

ところが、キノコには、加齢によって低下する免疫力を強化する成分が多いことが分か

ってきている。免疫機能を高めて、ガンの発生を抑える働きもあると期待されている。その宣伝効果が出てきているのか、わが家にもやたらとキノコを使った料理が多くなってきた。ラクヨウ（イグチ）、ボリボリ、ヒラタケ、シメジ、スギタケ、ナメコなどは私もよく採って来たものである。柳の木などに生えているナメコは店で売っているものや瓶詰めにしているものとは形も味も随分と違いとても旨い。この黄色い頭を持ち上げているキノコをタモギタケと確定する事は出来ず、そのままにしてその場を立ち去った。

夕闇が追って来たので、もう一度、初めに入った堰堤に向かう。そしてバツタを模したフライを浮かべるとニジマスが果敢にアタックして来て、未熟な私にもそのうちの何匹かを手中に収めることが出来た。輪廻転生である。